



田植えの終わったばかりの水田には
薄緑色の稲の苗が細い茎をぬるんだ泥の中に入れ五月のかわいた風の中に穂先を揺らしていた。

ぼんやり日向ぼっこをしながら、小学生になったばかりのあっちゃんは、溜息をついた。

「今度の運動会の五十メートル走出不くないなあ〜。運動会なんてなくなっちゃえば、いいのに」

あっちゃんは、かけっこが大の苦手だった。

小学校に入学してから一度も旗の立つ列に並んだ事もないし、
まして表彰台でピカピカのメダルを校長先生から貰った事もない。

あっちゃんは、“はあ〜”と、溜息をついた。

そして、小さな体を縁側に横たえた。

南向きの縁側には、暖かな五月の陽射しが降りそそぎ、柔らかな風が頬をなでる。

突然、さあ〜と、かわいた風が、吹いたかと思うと目の前に、

同じ位の年の陽に焼けた女の子が立っていた。

「そんなとこで何してんの？」

女の子は、まるで男の子のような口のきき方であっちゃんに尋ねた。

「何って...、ちょっと“しんこく”な悩み事を抱えているの。」

“しんこく”という言葉が、あっちゃんの最近のお気に入りの言葉だ。

TVの難しい仕事をしている人達が、よく使うからだ。

「何？その“しんこく”な悩みって」

女の子は、あっちゃんを目を見つめながら聞いてきた。

「一えっとね...」

あっちゃんは、ためらいながらも、その子に“しんこく”な悩みを打ち明ける事にした。

「今度の運動会の五十メートル走の事なんだけれど...」

男の子のような女の子は、首を傾げながらあっちゃんの悩みを自分の事のように真剣に聞いた。

そして、直ぐに、明るく言った。

「そんなの大丈夫だよ！私に任せて。」

良い“かいけつあん”が、あるよ！」

男の子のような女の子は、ニッコリと笑いながら、あっちゃんに言った。

そして、あっちゃんの手を引っぱって、外に出ようとする。

体を斜めにしながら、あっちゃんは、小さな体を起こし軒下の運動靴の中に足を入れた。

男の子のような女の子は、あっちゃんの手をにぎりしめ、ずんずんと前を歩いて行く。

引っぱられる腕が抜けそうだ。

「こっち、こっち！」

と言いながら、女の子は、舗装されていない農道を駆けていく。

あっちゃんは、男の子のような女の子の後ろ姿を見ながら、茫然とした。

(この子は、いったい、どこの子なんだろう？川の向こうの坂の上の子かしら...?)

あっちゃん息が切れてきた頃、男の子のような女の子とあっちゃんは、

トタン張りの車庫の裏の小さな空き地に到着した。

「ほら！」

男の子のような女の子は、小さな空き地の地面を指さした。

「ヘビいちご！！」

「ヘビいちご？！」

まりちゃんは、すっとんきょうな声を上げた。

「ヘビいちごって、何？」

「ヘビいちご、知らないの？」

男の子のような女の子は、目を丸くした。

「蛇莓は、蛇が食べるイチゴ！これを靴で踏むと足が速くなるんだよ！」

男の子のような女の子は、あっちゃんの目の前で赤くて小さな蛇莓を踏んで見せた。

「こうして靴の裏で踏み潰すの」

「へえ～知らなかった…。これで足が速くなるの？」

「そうだよ、すご～く速くなる！」

男の子のような女の子は、蛇莓の赤い汁が付いた運動靴の裏を見せた。

靴の裏は、蛇莓の果汁でうっすら赤く染まっている。

「やって、みやー(やってごらん)」

そう言って、男の子のような女の子は、あっちゃんに勧める。

あっちゃんは、言われるまま、おそるおそる蛇莓の実を踏んでみた。

“ぐじゅっ”

と、小さな実がつぶれる感触が足の裏につたわる。

なんだか、気持ち良いような悪いような不思議な感触だ。

「もっと、もっと、いっぱい、いっぱい踏んだ方が良いよ！」

あっちゃんは、ちょっと心を痛めながら蛇莓の赤い実を踏んだ。

踏みしめているうちに、頭の中が空っぽになっていく気がした。

「どう？どんな感じ？」

男の子のような女の子は、目を輝かせながら聞いてきた。

「よくわかんない…」

あっちゃんは、正直に、そう答えた。

“にや…”

と、口元で大きく笑って、男の子のような女の子は、言った。

「きっと、大丈夫だよ！蛇莓の力は凄いんだから！」

そして再び、あっちゃんの手を男の子のような女の子は、つかんで、もと来た道を引きかえして行く。

ずんずん、ずんずん

おかっぱの髪が揺れている。お日さまの光で輝いている。

あっちゃんは、ただ、ぼんやり引きずられながら、その後をついて走った。

縁側の廊下に腰を下ろされ、あっちゃんに、男の子のような女の子は、言った。

「あとわぁー、そうだなぁ...、
“よーい、どん！”の
ピストルの音に驚かないでね！」

「よーいのかげ声で、大きく息を吸い込んで、
“パンッ！”

と鳴ったら、駆け出すだけだから！

んで、ゴールのテープだけを見て一気に走るの！

テープだけを見て、一気にだよ！」

男の子のような女の子は、そう言って笑た。

「うん、頑張る！！」

あっちゃんは、元気よくそう答えた。

五月の乾いた風が、サッと緑の苗を揺らした。気持ちの良い風だった。

「ちょっと！そこどいて。洗濯もの置けないじゃない。」

突然大きな声が、響き渡った。その声を聞いてあっちゃんは、体を起こした。

「お昼寝してたの？」

お母さんが、パリパリに乾いたタオルを畳みながら言った。

「お昼寝？って...、私、寝てたの？」

「うん、寝てたよ。」

と言うと、お母さんは、手早く畳んだ洗濯ものを持ち上げ、箆笥に仕舞いに奥に入っていった。

「『夢』...だったのかしら...？」

西に傾くお日さまの光の中で、優しい五月の風が、あっちゃんの頬を撫でる。

ぼんやりとした表情をしながら、あっちゃんは思った。

「一きっと、上手くいく。」

あっちゃんの耳もとで、

“パンッ！”

と、スタートを告げるピストルの音が鳴り、

火薬の香りが鼻をかすめた。

<終>

コメント